

ブレイディみかこ著『労働者階級の反乱～地べたから見た英国EU離脱』
光文社新書（2017年）

世界を驚かせた英国のEU離脱決定。日本をはじめ世界のメディアはEU離脱を、「右傾化・排外主義の現れ」とか「ポピュリズムの台頭」などと報道し、特に、下層労働者における移民の排斥、排外主義の広がりを指摘する有識者が多かった。

しかし、英国人労働者と結婚し自らも保育士として働く著者はこれに疑問を感じ、夫の友人労働者へのインタビューを行った。その結果、何故労働者がEU離脱を選んだのか、その本音を引き出すことに成功している。また、セリーナ・トッドの研究書などを用いて英国労働者階級の100年を概観し、その分析を通して英国労働者階級がEU離脱を選んだ背景の歴史的経緯を整理、分析している。

このように、著者は労働者へのインタビューと文献研究を通して、英国のEU離脱決定の背景にある労働者階級の歴史と要因をていねいに分析している。その結果、著者が見出したのは、政治に見放された労働者階級の激しい怒りだった。

著者は、英国労働者階級のEU離脱選択の背景にあるのが、保守党、労働党両党の歴代政治家が実施してきた超緊縮財政政策と、それによる雇用縮小と賃金凍結、そして民営化など公共サービスの削減にあったと分析している。特に、2010年以降の保守党政権における強硬な緊縮政策は、労働者階級の中ですら格差をうみだしたとみなしている。

また、今回の離脱決定の背景に移民や出稼ぎ労働者の排斥があると意図的に誤解されていることに著者は強く反発している。すなわち90年代以降、特に21世紀に入ると、不況や緊縮財政による労働者階級の貧困と格差拡大を隠蔽するために「人種」概念が利用され、その結果、階級問題が人種問題にすり替えられてしまったという。いわば「人種」概念でもって労働者階級が意図的に分断され、このため階級問題が隠蔽されることになったと考えている。このためEU離脱の主張が移民排斥と誤解されることとなったのである。このように著者は、労働者階級の置かれた歴史的立場を理解しなければ、EU離脱決定の真の問題を理解できないと考え、この問題が移民・出稼ぎ労働者問題にすり替わることに警告している。

ところで日本に目を向けると、EU離脱決定のような国の将来を左右する重要な政治的決断の機会を日本の労働者階級は与えられているだろうか。そもそも決断の母体となる労働者階級なるものは、社会的、経済的に概念として析出されるにしても、影響力のある実体として確認できるのか疑問である（一方、国民間に所得・生活水準に大きな格差のない国民総中流社会は、非正規労働者の増大などから幻想にすぎないことはいままでもない）。

これは英国と日本における映画作品を対比しても明らかで、「トレインスポッティング」「フルモンティ」「リトルダンサー」「プラス！」といった胸を打つ良質の「労働者」映画が制作される英国に対し、日本では若者の恋愛を柱とした悩みや事件を描く青春ラブロマンスが映画制作の中心である（文学では派遣など非正規労働者を描いた作品は多く見られるが、しかし「労働者」文学ではない）。

重要な政治的決断の手段として国民投票の機会が限られる中、人びとの政治的決断は与党、野党の枠に絡めとられ、そして、投票用紙は分裂と内輪もめに終始する野党の中に消えてしまっている。

日本でも英国同様に、働く人の生活と仕事を取り巻く環境は厳しさが一層増している。英国労働者階級の決断と行動に対し、私たちはどのような決断をすべきなのか。英国のEU離脱は遠い異国の出来事ではない。（西村 博史）